

民俗文化

第二十八号



①霧島神宮

(鹿児島県霧島市霧島田口、2015年11月、網撮影)

日向の霊峰高千穂峰に鎮座する延喜式内社。「陶月」小玉さんは毎年霧島神宮に逆鐙人形を奉納されている。

②帖佐人形の窯元の中心だった高樋集落 (鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影) 古い石垣に昔の郷土の集落の面影が残る。



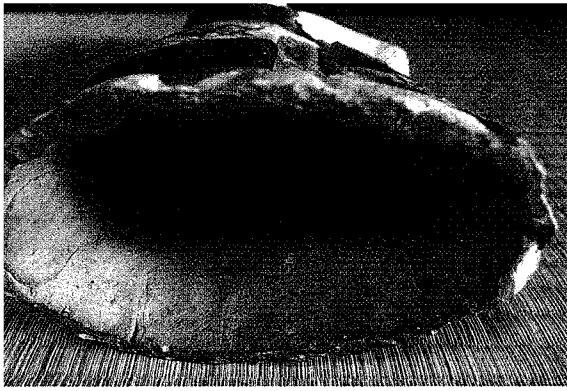
③「帖佐人形窯元」の折田貴子氏

(鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影)

笑顔を絶やさず帖佐人形の歴史や伝統をお話いただいた。折田さんの優しい語り口の奥に、伝統工芸を守り続ける熱い思いが伝わってくる。

④帖佐人形「鳥かごもち」 (鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影)





⑤「鳥かごもち」の底部

(鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影)

帖佐人形も基本的には底板は付けず、補足粘土で内側の調整を行う。表の胡粉が底端面に一部付着している。

⑥帖佐人形「神功皇后」

(鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影)



⑦「神功皇后」背面

(鹿児島県始良市西餅田、2015年11月、網撮影)

背面は胡粉だけで彩色は行わない。接合部の粘土の「ちり」を削り取らずに残すのが、帖佐人形の特徴である。



⑧飫肥の城下町

(宮崎県日南市飫肥、1995年3月、藤井撮影)

昭和52年(1977)には飫肥城址と周辺の町並みが九州で初めての「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。飫肥の城下町には水路が張り巡らされており、防火用水や風呂水などに利用されてきた。一時は、水路が崩れたり、水が止まるなどで、利用されなくなっていたが、近年では、コイを放流して、観光客を楽しませている。飫肥には、明治・大正時代に柳田国男が訪れたことを記念する記念碑も立っている。





⑨八坂神社のナギ

(宮崎県宮崎市城ヶ崎、2016年3月、藤井撮影)

八坂神社は、大淀川河口近くの右岸に鎮座する。ナギは八坂神社の御神木になっている。5・6年前からナギの葉でお守りを作ようになった。以前は、子どもたちが遊びで葉を取ることがあったという。力を入れてちぎろうとしてもちぎれないため、ナギのことはチカラシバという。

⑩みそぎが池

(宮崎県宮崎市阿波岐原町、2016年3月、藤井撮影)

一ツ葉海岸から防風林を越えたところにある。イザナミノミコトを追って黄泉の国へ行ったイザナギノミコトが穢れを祓うために禊をしたところという。



⑪宮崎神宮大祭

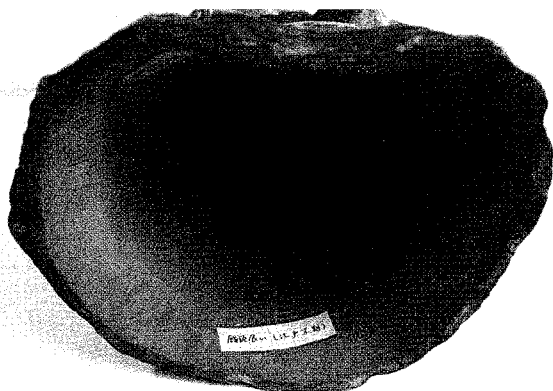
(宮崎県宮崎市、1972年10月、渡辺撮影)

⑫佐土原人形「饅頭喰い」

(宮崎県宮崎市神宮、2015年11月、網撮影)

12から20までは宮崎県総合博物館所蔵の佐土原人形である。





⑬「饅頭喰い」底部

(宮崎県宮崎市神宮、2015年11月、網撮影)

佐土原人形は底板をもたず、内側から接合部を粘土で補強する。

⑭佐土原人形「熊谷直実」

(宮崎県宮崎市神宮、2015年11月、網撮影)



⑮「熊谷直実」背面

(宮崎県宮崎市神宮、2015年11月、網撮影)

背面は他の土人形と同じく胡粉を塗布するだけで、彩色は行わない。背面に購入した年月日を墨書する。



⑯佐土原人形「三番叟」

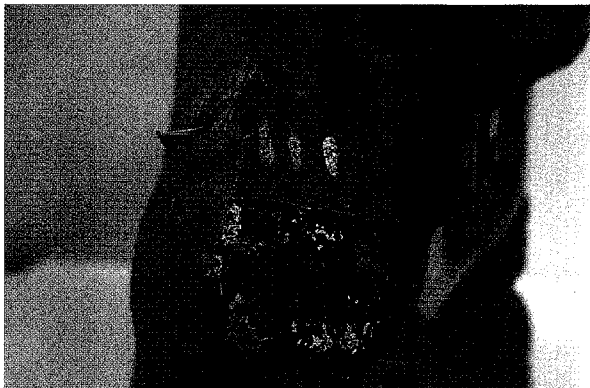
(宮崎県宮崎市神宮、2015年11月、網撮影)





⑰佐土原人形「武内宿禰」
(宮崎県宮崎市神宮、2015 年 11 月、網撮影)

⑱「武内宿禰」合わせ目細部
(宮崎県宮崎市神宮、2015 年 11 月、網撮影)
合わせ目を和紙で塞いでから彩色を行っている。

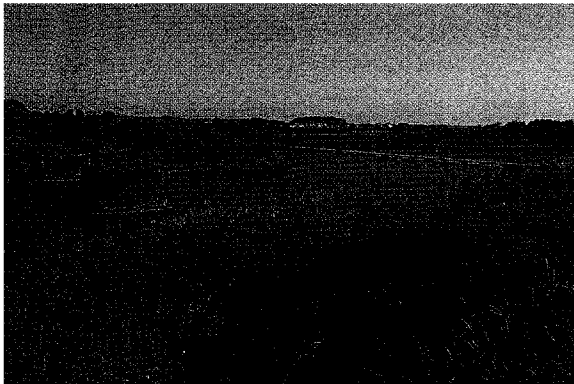


⑲佐土原人形「石屋の弥陀六」
(宮崎県宮崎市神宮、2015 年 11 月、網撮影)

幕末から明治にかけて田舎歌舞伎の隆盛をうけて、佐土原では多くの歌舞伎人形が製作された。歌舞伎の複雑な顔や手の動きを再現するため、差し手・差し首の技法が多用された。

⑳佐土原人形「安倍貞任」の目線
(宮崎県宮崎市神宮、2015 年 11 月、網撮影)
歌舞伎芝居は目がものを言う。人形の目線の先にさまざまな感情が表現されている。

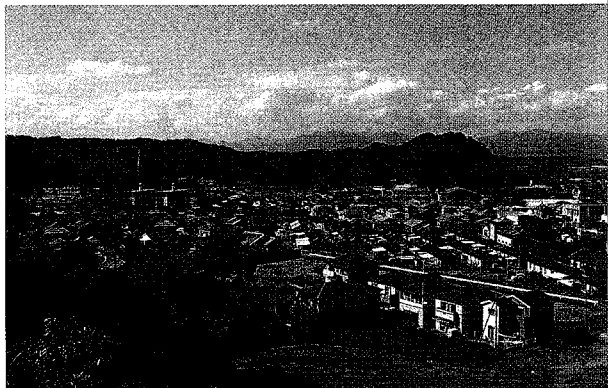




②① 一ツ瀬川河口付近の佐土原福島湊
(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

大阪・江戸への公式な港は日向細島湊であったが、様々な商品が佐土原福島湊から城下へ運ばれており、佐土原の商人町の基盤となった。明治に入り新たに日向街道の橋が架けられたが、昭和25年の台風で木造橋は流出し石造橋脚だけが残っている。

②② 佐土原の旧城下町
(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

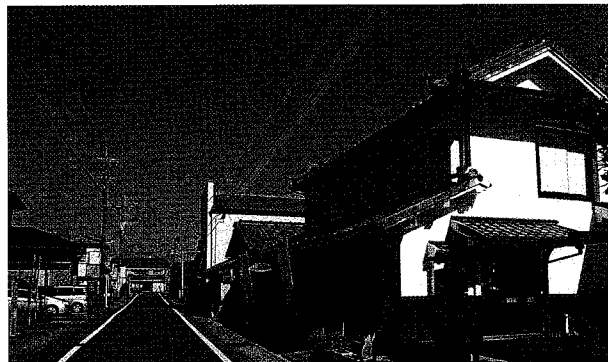


②③ 愛宕神社
(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

神社が鎮座する山の斜面から古窯が発見されており、佐土原焼を生産した「苗代焼物蔵古所」の跡地とされる。

②④ 旧城下町の新町通り
(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

往年には多くの人形屋が軒を並べた通りである。手前右側の旧家は江戸時代から味噌・醤油醸造販売を行っていた旧坂本家で現在は商家資料館となっている。





②⑤旧坂本家の屋根にのる瓦鍾馗

(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

九州で唯一屋根にあげられた瓦鍾馗の資料。新町では瓦生産も盛んに行われていたようで、瓦職人と土人形との関係を想起させる。

②⑥伏見人形「布袋」(左手前)と

それを模した佐土原人形「布袋」(右後方)

(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)



②⑦「ますや」店先にたつ阪本兼次・由美子夫妻

(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

江戸時代から伝わる佐土原人形窯元「ますや」を継承した阪本さん夫妻。二人三脚で伝統を継承しようとする強い意志に心打たれる。

②⑧「ますや」に伝わる「布袋」原型

(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

昭和の初めまで人形師として活躍していた、現当主の父である阪本兵三郎の作品。





②⑨「布袋」原型より製作された人形
(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

③⑩「陶月」小玉清勝・好子夫妻

(宮崎県宮崎市佐土原町、2015年11月、網撮影)

廃絶寸前の佐土原人形に新しい風を吹き込んだ小玉清勝さん。伝統工芸の地域への継承活動にも力を入れてこられ、現在も奥様と仲良く佐土原人形の灯を守っている。



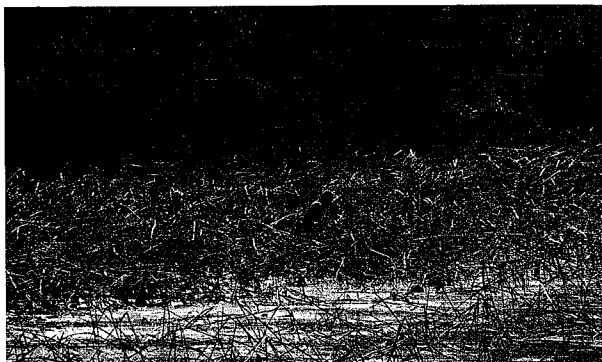
③⑪湖水ヶ池と水沼神社

(宮崎県新富町日置、2015年12月、藤井撮影)

湖水ヶ池は富田浜から防風林を越えたところにある。湖畔には水沼神社があり、池はこの神社の所有になっている。この池ではレンコンが採れる。レンコンを採る権利は水沼神社の氏子に限られている。毎年、3月21日の祭りでレンコンを採る区画を決め、10月から3月にレンコンを掘る。5・6メートルの竹を立ててレンコンを採る。池の中は見えないので、手足で探って採る。今はエンジンをかけてレンコンがあるところに水をかけて採るようになった。

③⑫湖水ヶ池のレンコン堀り

(宮崎県新富町日置、2015年12月、藤井撮影)





③③ 古墳祭り
(宮崎県西都市、1969年11月、渡辺撮影)

しろみ
③④ 銀鏡神楽
(宮崎県西都市、1976年12月、渡辺撮影)
幣さし。



しろみ
③⑤ 銀鏡神楽
(宮崎県西都市、1976年12月、渡辺撮影)
ししとぎり。

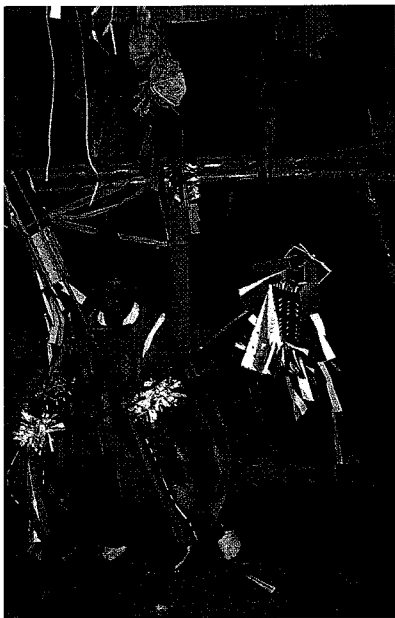
しろみ
③⑥ 銀鏡神楽
(宮崎県西都市、1976年12月、渡辺撮影)





③⑦ イノシシ狩りに出る風景
(宮崎県西都市銀鏡、1976 年 12 月、渡辺撮影)

③⑧ 米良神楽
(宮崎県西米良村小川、1993 年 12 月、渡辺撮影)
幣さし。



③⑨ 米良神楽
(宮崎県西米良村小川、1993 年 12 月、渡辺撮影)
荒神。



④⑩ 椎葉神楽
(宮崎県椎葉村大河内、1993 年 11 月、渡辺撮影)
榎屋神楽のつがもり。



④① 椎葉神楽

(宮崎県椎葉村大河内、1993年11月、渡辺撮影)
 柵尾神楽の芝引き。

④② 椎葉神楽

(宮崎県椎葉村大河内、1993年12月、渡辺撮影)
 竹の枝尾神楽の宿借り。



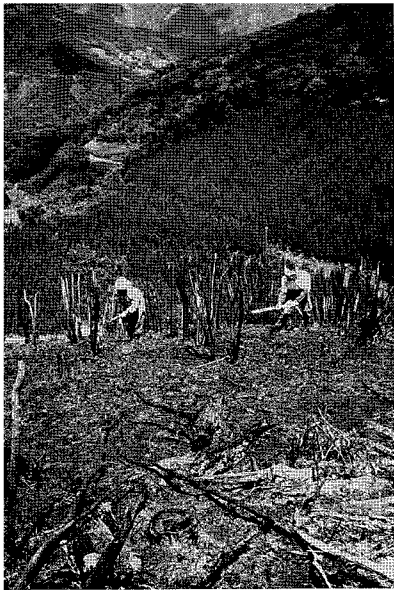
④③ 椎葉神楽

(宮崎県椎葉村大河内、1993年12月、渡辺撮影)
 竹の枝尾神楽のしめ引き鬼神。

④④ 仏式結婚

(宮崎県椎葉村、1980年12月、渡辺撮影)



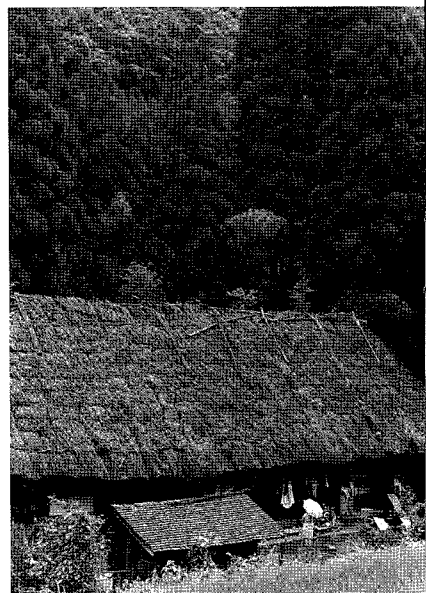


④⑤ 焼畑の手入れ
(宮崎県椎葉村不動野日添、1980年～1993年ごろ、渡辺撮影)

④⑥ 焼畑の手入れ
(宮崎県椎葉村、1980年～1993年ごろ、渡辺撮影)



④⑦ 草を運ぶ女性
(宮崎県椎葉村、1980年～1993年ごろ、渡辺撮影)



④⑧ 椎葉村の民家
(宮崎県椎葉村、1980年～1993年ごろ、渡辺撮影)



④五ヶ瀬荒踊

(宮崎県五ヶ瀬町、2000年9月、渡辺撮影)

⑤高千穂神楽

(宮崎県高千穂町田原、1974年～97年、渡辺撮影)
七貴神。



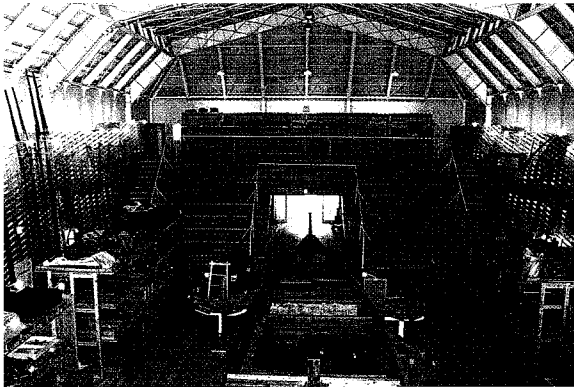
⑤高千穂神楽

(宮崎県高千穂町、1974年～97年、渡辺撮影)
手力男。

⑤高千穂神楽

(宮崎県高千穂町向山、1974年～97年、渡辺撮影)
うづめ。





⑤③ 海の資料館

(大分県佐伯市蒲江竹野浦、2015年11月、藤井撮影)

佐伯市蒲江町では、回遊魚を対象としたリアス式海岸の漁業がおこなわれてきた。地曳網・棒受網・巾着網など大型の網を使った漁業が発達したほか、一本釣りや延縄漁、海藻採取漁、貝採り、潜水漁なども盛んであった。多様な漁法がおこなわれてきたため、多様な漁具が用いられてきた。旧蒲江町が収集した「蒲江の漁撈用具」1978点は、国の有形民俗文化財に指定され、海の資料館に展示されている。

⑤④ 宝永・安政の地震・津波の石碑と浦代浦の集落

(大分県佐伯市米水津浦代浦、2015年8月、藤井撮影)

佐伯市米水津では、宝永4年(1707)、安政元年(1854)に、地震による大津波が襲っている。地元では古文書を解読して、未来に伝えるための活動がおこなわれている。その結果、浦代浦の高台にある養福寺の石段を2段残すところまで津波が来たことが分かった。11mの津波ということになる。この石碑は、東日本大震災後の平成23年(2011)11月に養福寺の境内に建てられた。



⑤⑤ 粟島神社

(大分県佐伯市米水津小浦、2015年8月、藤井撮影)

社伝によれば、南朝の菊池氏が海上で遭難しそうになったおり、紀州の淡島明神を遙拝したところ、この浦に着くことができたという。旧米水津村や旧蒲江町には、ほかにも紀州とのつながりを示す伝承や資料が残されている。

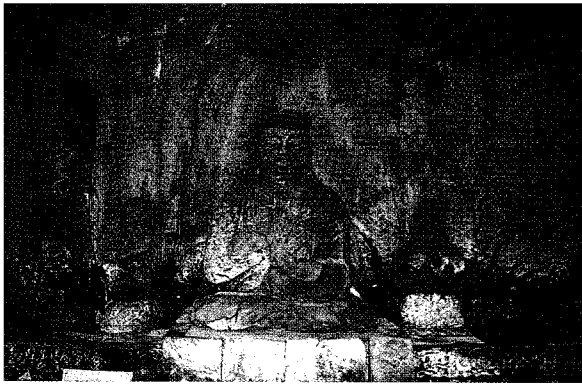


⑤⑥ 龍神池

(大分県佐伯市米水津浦代浦間越、2015年8月、藤井撮影)

浜から砂丘と松林を越えたところに周囲約500mの龍神池がある。言い伝えでは、ここにはオスの龍がいて、旧上浦町の蒲戸にあった池にはメスがいて、龍が通っていたという。昭和20年代には、青年たちが竹の筒を池の周囲に入れてウナギを捕った。青年団の収入源になっていたという。池の中に網を曳いてボラの稚魚を捕ることもあった。女性たちはシジミも採った。





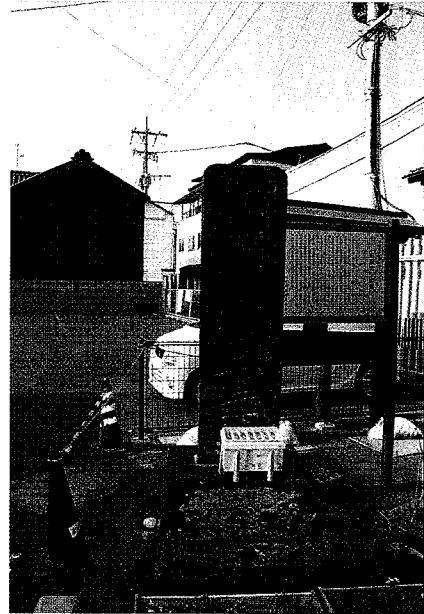
⑤7 臼杵石仏

(大分県臼杵市深田、2005 年 3 月、藤井撮影)

⑤8 石敢当

(大分県臼杵市臼杵、2005 年 3 月、藤井撮影)

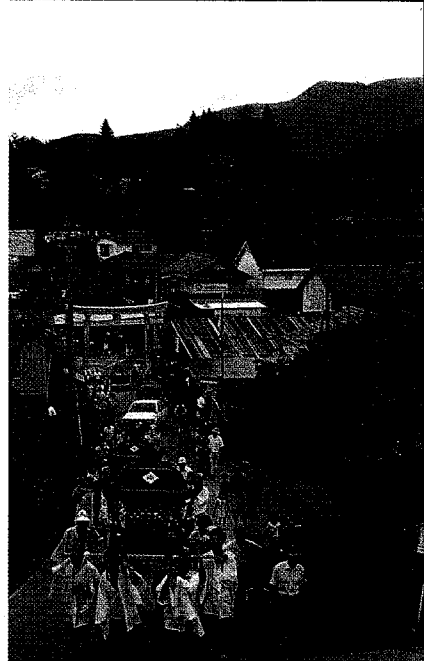
建立年代は不明であるが、江戸時代には建てられていたという記録がある。言い伝えでは、交易の旅人達が大量集まり、喧嘩口論が絶えなかったため、明人（中国人）に教えてもらった石敢当の碑を建てたという。臼杵が対外貿易の拠点であった 16 世紀ごろに伝わり、その後は商家の商売繁盛を願い、町の守り神になっていったと考えられている。



⑤9 黄飯

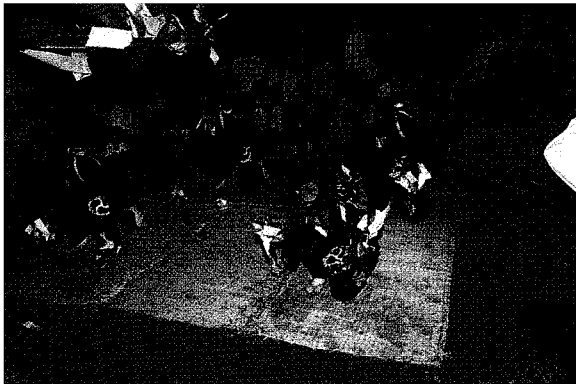
(大分県臼杵市、2005 年 3 月、藤井撮影)

臼杵地方の冬の郷土料理。くちなしの実で黄色く色付けしている。江戸時代、臼杵藩が財政難であったとき、赤飯の代わりに慶事の料理として出されたのが始まりという。



⑥0 久住神社夏祭り

(大分県竹田市久住町、1983 年 8 月、渡辺撮影)



⑥1 かっぱ踊り
(大分県日田市、1980年10月、渡辺撮影)

⑥2 日出の城下町
(大分県日出町、2016年3月、藤井撮影)



⑥3 成仏寺の修正鬼会
(大分県国東市、1974年2月、渡辺撮影)

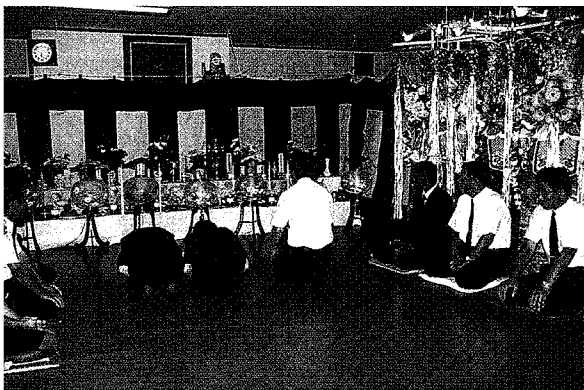


⑥4 成仏寺の修正鬼会
(大分県国東市、1974年2月、渡辺撮影)



⑥5 成仏寺の修正鬼会
(大分県国東市、1974年2月、渡辺撮影)

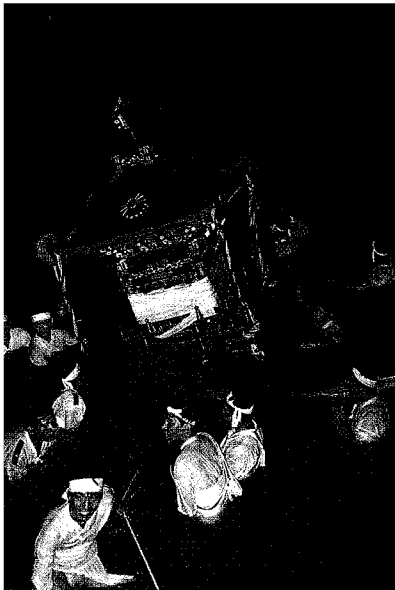
⑥6 姫島の盆飾り
(大分県姫島村、1976年、渡辺撮影)



⑥7 姫島の初盆参り
(大分県姫島村、1976年、渡辺撮影)

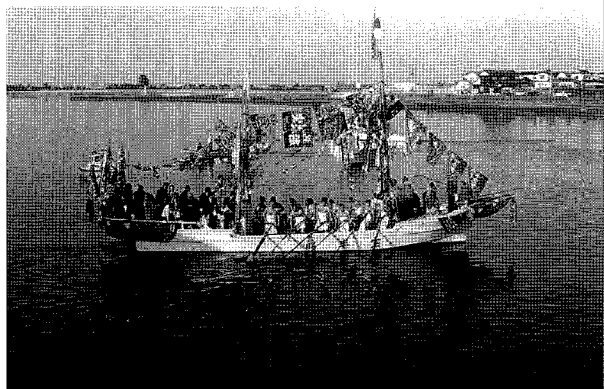
⑥8 姫島の盆踊り
(大分県姫島村、1996年、渡辺撮影)





⑥9 川渡祭

(大分県豊後高田市、1972 年旧 10 月、渡辺撮影)



⑦0 ホーランエンヤ

(大分県豊後高田市、1985 年 1 月、渡辺撮影)

小さな川だが、すぐ近くは海。満潮を待って船を漕ぐ。掛け声が冬の空に響く。岸から大勢の人が見守る。



⑦1 鎮疫祭

(大分県宇佐市、1985 年 2 月、渡辺撮影)

御心経会。

⑦2 鎮疫祭

(大分県宇佐市、1985 年 2 月、渡辺撮影)

火渡り。





⑦③精霊送り

(大分県宇佐市長洲、1992年8月、渡辺撮影)

⑦④精霊送り

(大分県宇佐市長洲、1992年8月、渡辺撮影)



⑦⑤傘鉾踊り

(大分県中津市、1975年8月、渡辺撮影)



⑦⑥ヤンサ祭り

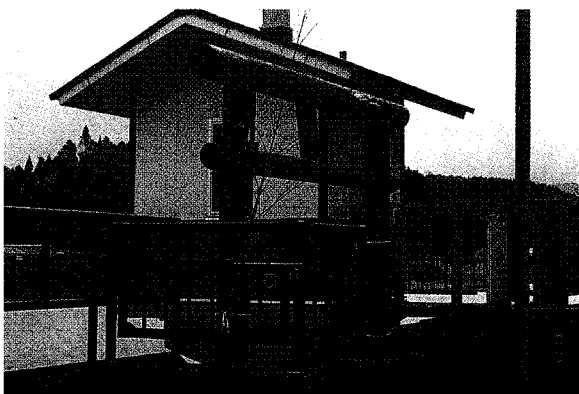
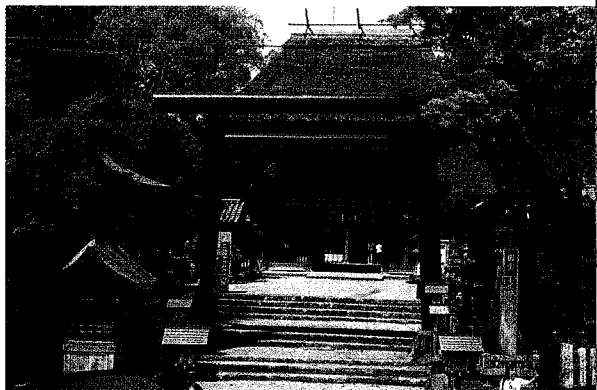
(大分県中津市耶馬溪町、1981年12月、渡辺撮影)





⑦球磨川
(熊本県人吉市、1975 年、渡辺撮影)

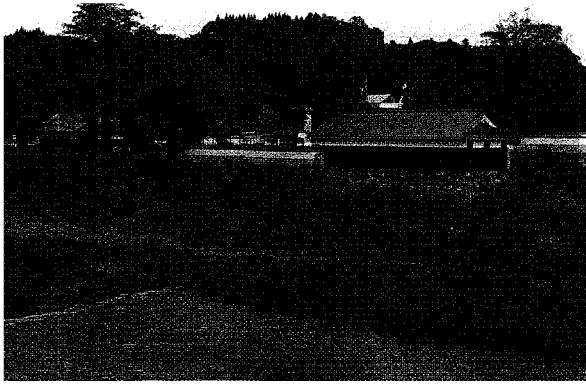
⑦青井阿蘇神社
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
人吉藩主は参勤の際、ここへ詣でてから江戸へ向かった。



⑨祓川の瀬
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
人吉藩主船乗り場跡。参勤の際は、ここから舟で球磨川を八代へ下った。

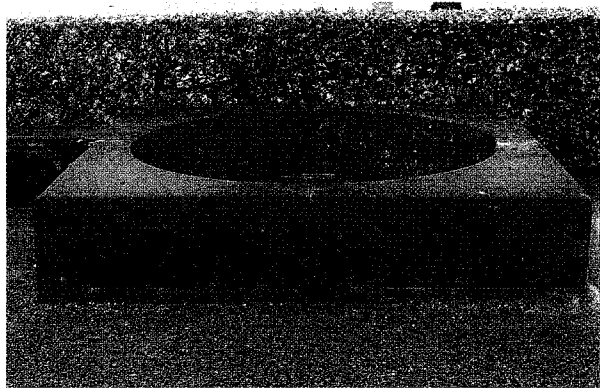
⑩球磨川と人吉市街
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
人吉城址より撮影。





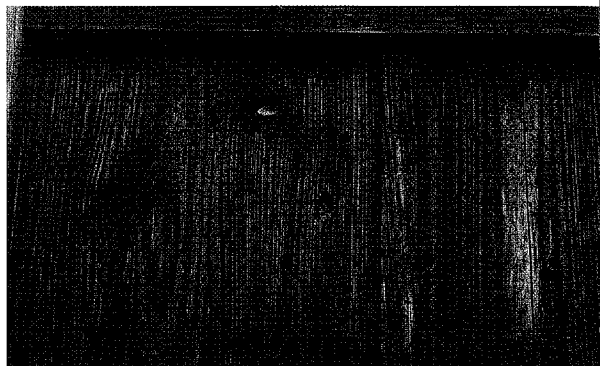
⑧1 人吉城址
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
手前は球磨川。

⑧2 伝相良清兵衛井戸
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
人吉城址。



⑧3 林正盛の碑
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)
人吉城址にある。近世の球磨川舟運は正盛によって整備された。

⑧4 西南戦争の弾痕
(熊本県人吉市、2015 年 9 月、胡桃沢撮影)





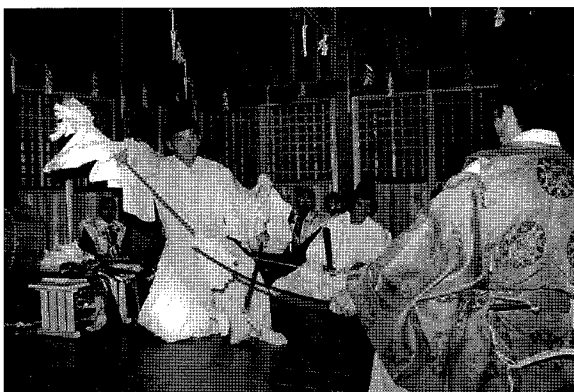
⑧5 臼太鼓踊り

(熊本県人吉市、1973年5月、渡辺撮影)

⑧6 弁当屋

(熊本県人吉市、2015年9月、胡桃沢撮影)

JR肥薩線人吉駅の弁当屋。「汽車」の文字がなつかしい。



⑧7 球磨神楽

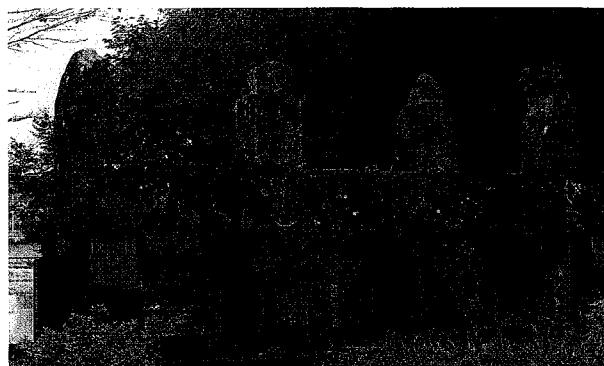
(熊本県多良木町、1981年11月、渡辺撮影)

振剣。

⑧8 百太郎溝取水口旧樋門

(熊本県多良木町、2015年9月、胡桃沢撮影)

百太郎溝は灌漑用水路だが、この樋門は球磨川の取水口に、江戸時代に構築されたもの。





⑧⑨百太郎溝

(熊本県多良木町、2015年9月、胡桃沢撮影)

⑨⑩水口のお札

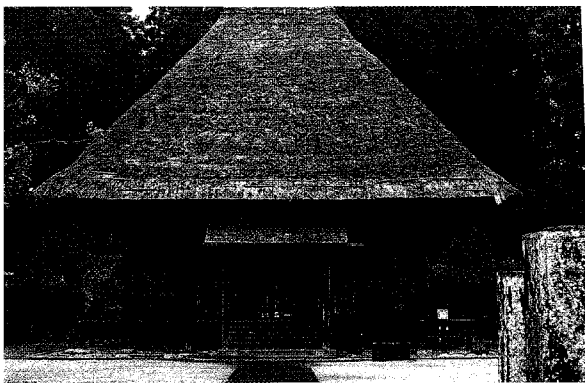
(熊本県多良木町、2015年9月、胡桃沢撮影)



⑨⑪青蓮寺阿弥陀堂

(熊本県多良木町、2015年9月、胡桃沢撮影)

鎌倉時代の建築。



⑨⑫王宮神社楼門

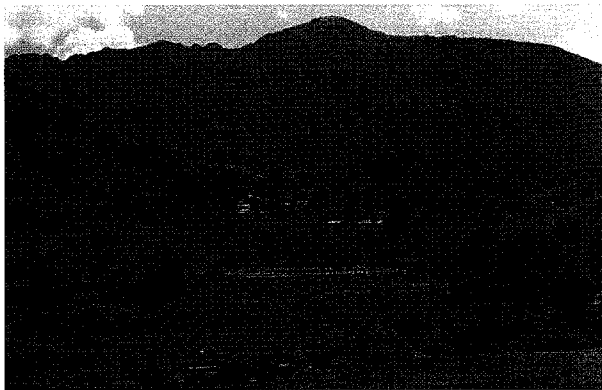
(熊本県多良木町、2015年9月、胡桃沢撮影)

室町時代の建築。





⑨③ 椎葉旅館
(熊本県湯前町、2015年9月、胡桃沢撮影)
くま川鉄道湯前駅前。



⑨④ 市房山
(熊本県、2015年9月、胡桃沢撮影)
肥後と日向の国境にある。熊本県側から撮影。



⑨⑤ 球磨川河口
(熊本県八代市、2015年9月、胡桃沢撮影)

⑨⑥ 妙見祭
(熊本県八代市、1991年11月、渡辺撮影)
神の乗り物の「亀蛇」。



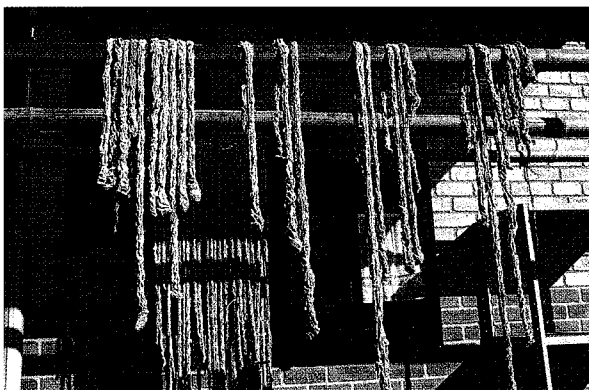


⑨7 飯食い祭り

(熊本県高森町、1983 年旧暦 10 月、渡辺撮影)

⑨8 風鎮祭

(熊本県高森町、1975 年 8 月、渡辺撮影)



⑨9 房切り大根

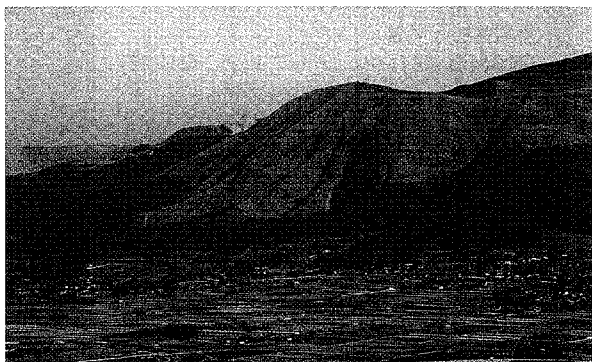
(熊本県南阿蘇村中松付近、2015 年 12 月、藤井撮影)

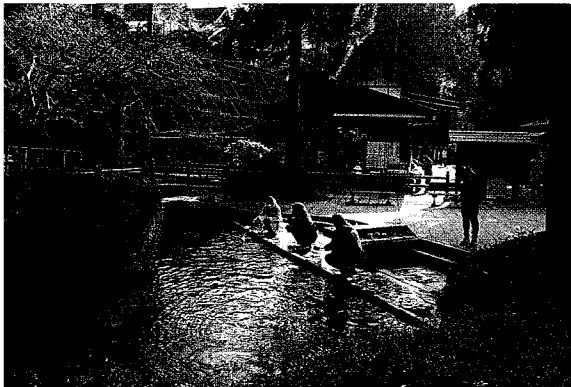
南阿蘇では切干し大根のことを房切り大根という。大根を蛇腹状に切って干した保存食。

⑩ 阿蘇山麓の集落と耕地

(熊本県南阿蘇村久木野、2015 年 12 月、藤井撮影)

阿蘇山麓のカルデラには、集落が点在し、その地形や水を利用した農業がおこなわれている。また、阿蘇山中腹に広がる草原も、稲作や畑作と結びつき、循環的に利用することで維持されている。「草原を活用した農業」、「貴重な草原性動植物の保全」、「美しい草原・農村景観の維持」、「農耕祭事が息づく伝統文化」を理由として、平成 25 年(2013)、「阿蘇の草原の維持と持続的農業」が世界農業遺産に認定された。





⑩① 白川水源

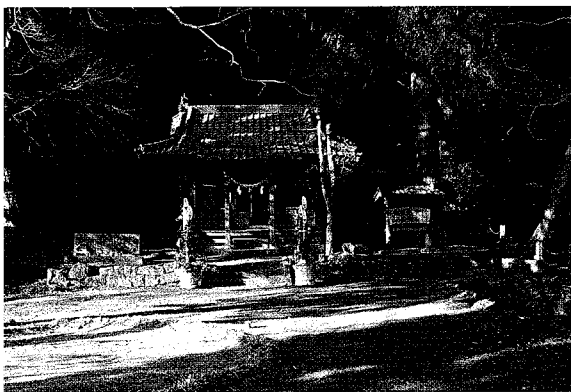
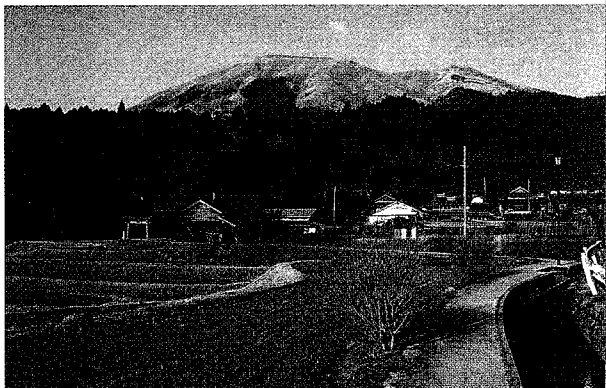
(熊本県南阿蘇村白川、2015 年 12 月、藤井撮影)

阿蘇山に降った雨は約 30 年、外輪山に降った雨は約 20 年かけて地表に湧き出すといわれている。このため、南阿蘇の低地にはあちこちで水が湧き出している。白川水源は熊本市内を流れる白川の水源のひとつである。南阿蘇村の白川吉見神社の森から湧き出している。毎分 60 トンの水が湧出する。現在は、水源近くに土産物屋などが立ち並び、外国人観光客も多数訪れている。

⑩② 塩井社の森

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)

中松の集落の中心部よりも上の方に位置し、周辺は森になっている。地元では、水源をオシオイサマと呼んで神聖視し、水源から流れる川を塩井川と呼んできた。この川は白川へと流れ込んでいる。水源にある塩井神社は水の神を祀る。水源はエメラルド色をし、毎分約 5 トンの水が湧出している。現在でも、飲み水として利用されるほか、中松 3 地区の 40 町歩の水田、隣接する長陽地区の 30 町歩の水田を灌漑している。



⑩③ 塩井社

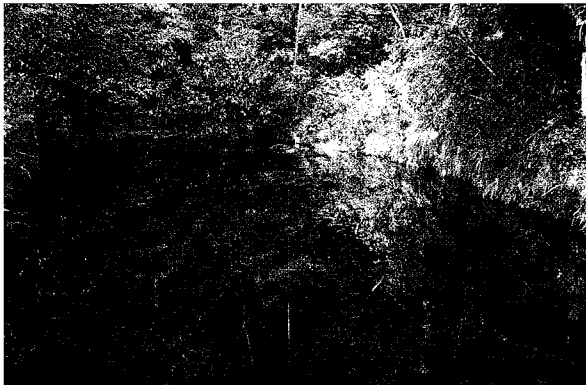
(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)

⑩④ 塩井社と水源

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)

平成 28 年 (2016) 4 月の熊本地震により、神社の拝殿が倒壊し、水源は枯れたと報じられている。5 月の NHK ニュースによると、水源の水を利用していた水田では、今年の田植えをあきらめざるをえない、という。





⑩塩井社水源

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)

⑪塩井社水源から水路へ流れる水

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)



⑫塩井社水源から南東へ流れる水路

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)



⑬塩井社水源から南西へ流れる水路

(熊本県南阿蘇村中松、2015 年 12 月、藤井撮影)



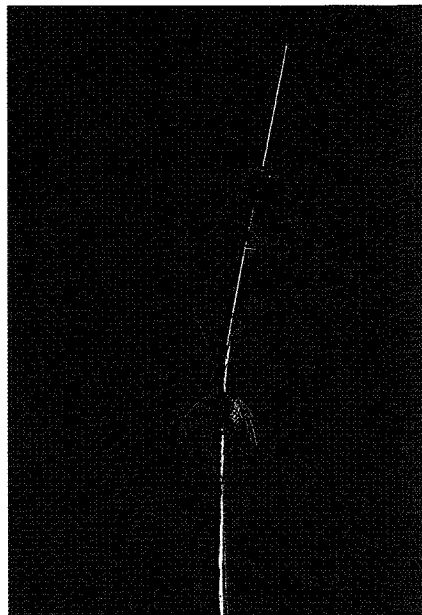


⑩寺坂水源

(熊本県南阿蘇村中松、2015年12月、藤井撮影)

周辺の人々は、今でも生活用水として、洗濯・農作物の洗浄・農耕機の洗浄などに利用している。池の脇には芋を洗う水車・芋車が設置されている。正教寺近くにあるため、寺の参拝者も利用する。毎分約5トンの水が湧出する。

⑩寺坂水源近くの民家の庭先に掲げられた目籠 (熊本県南阿蘇村中松、2015年12月、藤井撮影)



⑪長野の岩戸神楽

(熊本県南阿蘇村長陽、1985年10月、渡辺撮影)

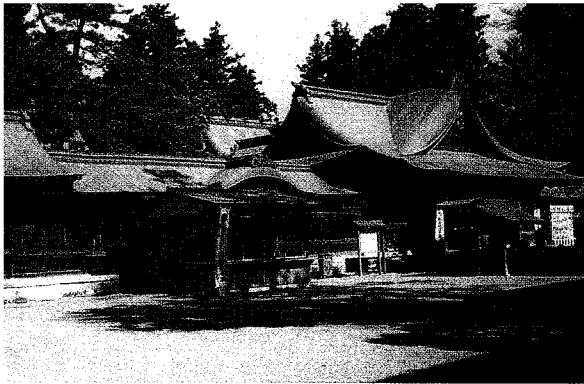
芝引荒神。



⑫長野の岩戸神楽

(熊本県南阿蘇村長陽、1985年10月、渡辺撮影)

みつけ。

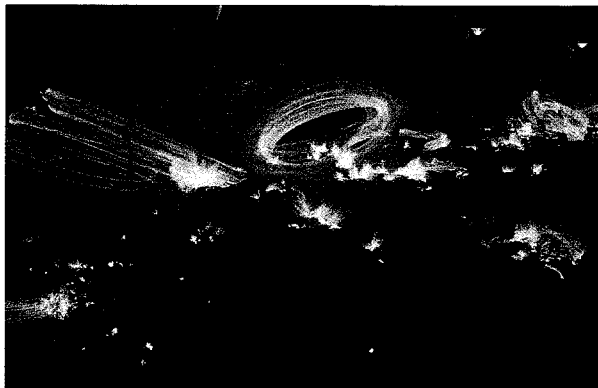


⑬阿蘇神社

(熊本県阿蘇市、1985 年 8 月、藤井撮影)
平成 28 年 (2016) 4 月の熊本地震で、神社の拝殿と楼門が倒壊した。

⑭御前迎え

(熊本県阿蘇市、1976 年 3 月、渡辺撮影)



⑮おんだ祭り

(熊本県阿蘇市一の宮町、1975 年 7 月、渡辺撮影)

神が稲の成長を見て回り、豊作を願う行事。7 月 26 日に国造神社、7 月 28 日に阿蘇神社でおこなわれる。御旅所を出発する神幸行列。

⑯おんだ祭り

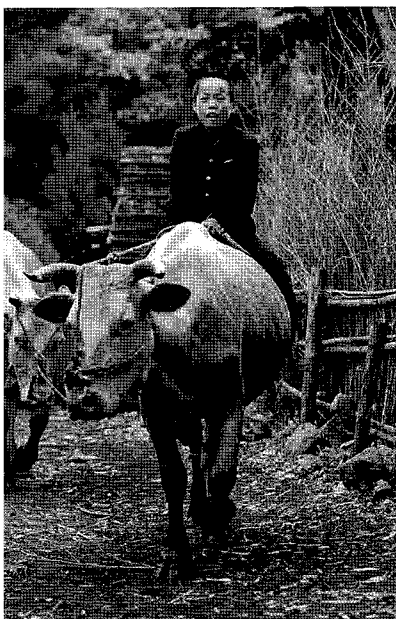
(熊本県阿蘇市、1980 年 7 月、渡辺撮影)
国造神社。





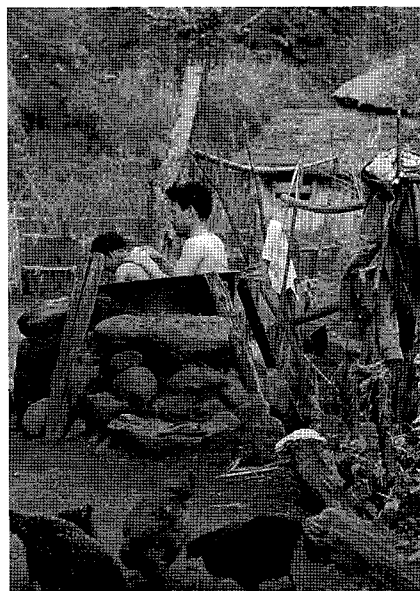
⑪ おんだ祭り
(熊本県阿蘇市、1980年7月、渡辺撮影)
阿蘇神社。

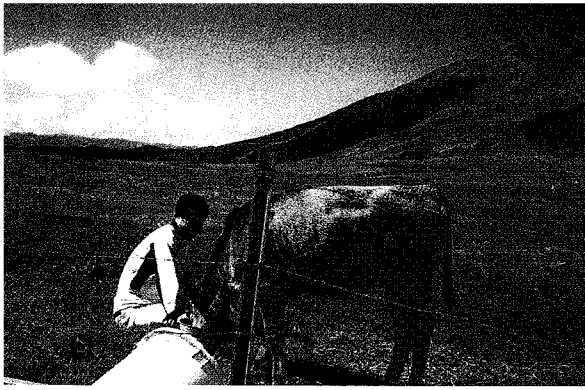
⑪ おんだ祭り
(熊本県阿蘇市、1980年7月、渡辺撮影)
阿蘇神社。



⑫ 阿蘇の山村
(熊本県阿蘇市、1969年5月、渡辺撮影)
大鶴の集落。現在は廃村。

⑫ 阿蘇の山村
(熊本県阿蘇市、1969年5月、渡辺撮影)
大鶴の集落。現在は廃村。





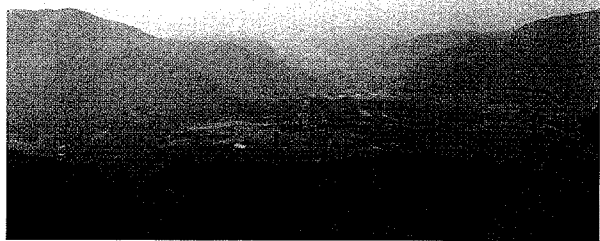
②① 阿蘇山の草原と牛

(熊本県阿蘇市、1985年8月、藤井撮影)

②② 阿蘇山中腹から熊本市方面を望む

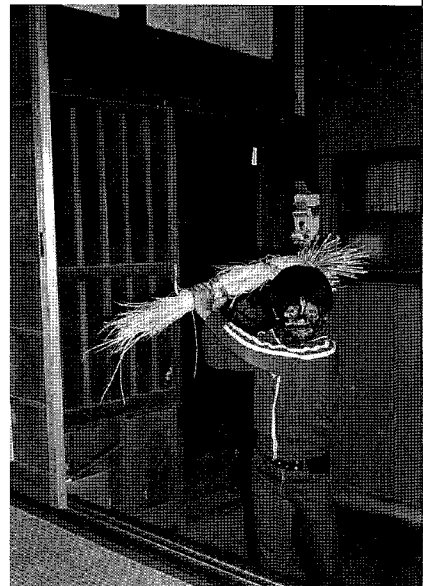
(熊本県阿蘇市、2015年12月、藤井撮影)

外輪山の切れ目あたりが立野地区。平成28年(2016)4月の熊本地震で落ちた阿蘇大橋がかかっていた。阿蘇山麓あたりが河陽地区。立野地区、河陽地区ともに、地震による土砂崩れで甚大な被害が出ている。



②③ 山鹿灯籠祭り

(熊本県山鹿市、1976年8月、渡辺撮影)



②④ かせいどるうち

(熊本県山鹿市、1978年1月、渡辺撮影)

各家を巡って、吼がながら玄関を叩く

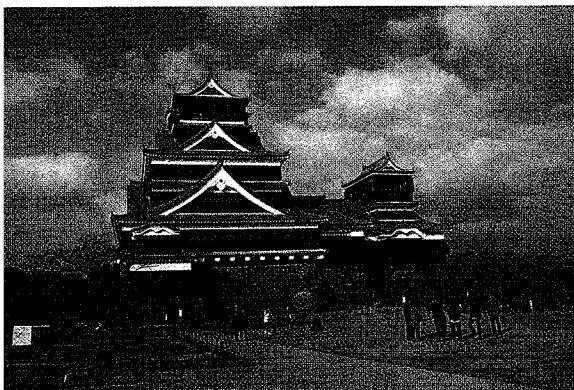


②⑤ 菊池神社秋祭り

(熊本県菊池市、1985 年 10 月、渡辺撮影)

②⑥ 藤崎八幡宮大祭

(熊本県熊本市、1999 年 9 月、渡辺撮影)



②⑦ 熊本城天守閣

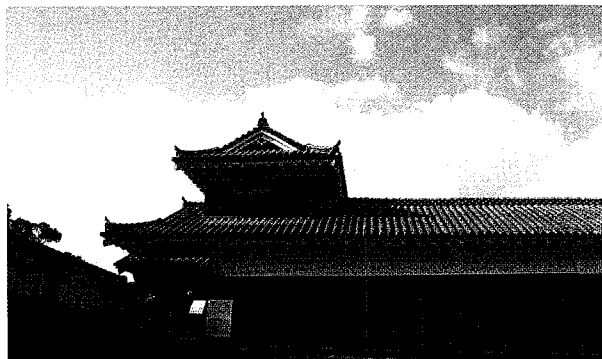
(熊本県熊本市、2015 年 12 月、藤井撮影)

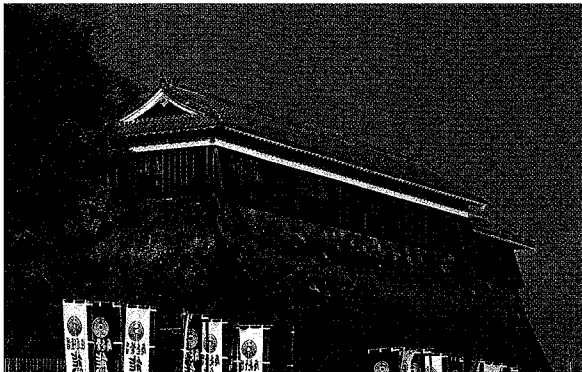
熊本城天守閣は、明治 10 年 (1877) の西南戦争開戦直前に消失したが、昭和 35 年 (1960) に復元した。平成 28 年 (2016) 4 月の熊本地震では、天守閣も瓦が落ち、土台の石垣が崩れるなどの被害を受けた。

②⑧ 続櫓

(熊本県熊本市、2015 年 12 月、藤井撮影)

宇土櫓の南に接続している櫓。宇土櫓は加藤清正の築城当時から残る櫓で、地上 5 階、高さは 19m あり、天守閣並みの威容を誇る。西南戦争の際も戦火を免れ、国の重要文化財となっている。宇土櫓の見学は、続櫓から入り、廊下を通じていくようになっていた。宇土櫓は熊本地震でも倒壊しなかった。ただし、宇土櫓から南へ伸びる廊下と、廊下に接続する続櫓が倒壊した。





⑫ 熊本城・東十八間櫓

(熊本県熊本市、2015年12月、藤井撮影)

熊本城には明治10年(1877)の西南戦争の戦火を免れた櫓が残されている。そのうちのひとつが本丸東側の東十八間櫓であり、国の重要文化財であった。しかし、平成28年(2016)4月の熊本地震で、石垣とともに櫓が倒壊した。

⑬ 熊本城・東十八間櫓

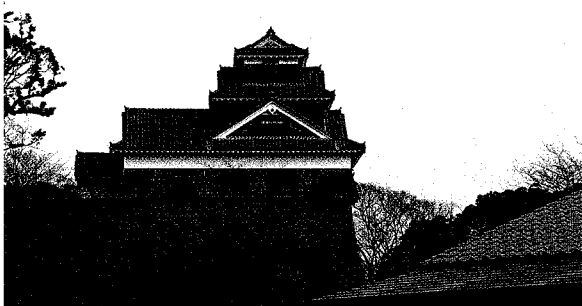
(熊本県熊本市、2015年12月、藤井撮影)



⑭ 熊本城・飯田丸五階櫓

(熊本県熊本市、2015年12月、藤井撮影)

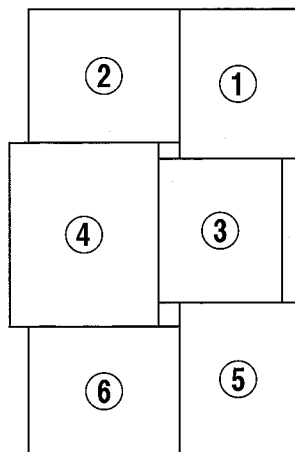
飯田丸五階櫓は平成17年(2005)に復元されたが、平成28年(2016)4月の熊本地震で、櫓の土台の石垣が崩れた。



⑮ 熊本市電と熊本城の石垣

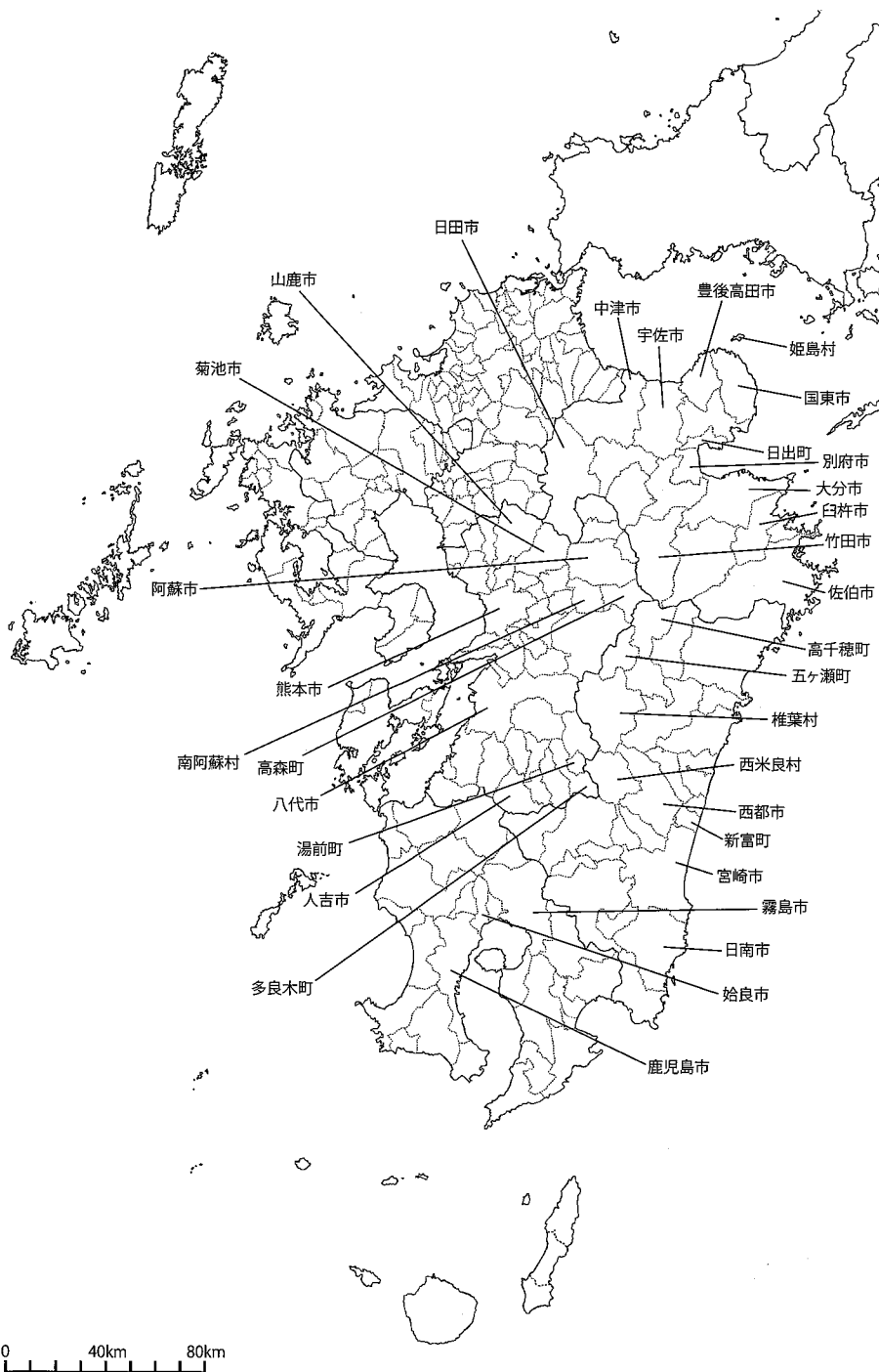
(熊本県熊本市、2015年12月、藤井撮影)





表紙

- ①銀鏡神楽で奉納されたイノシシの頭
(宮崎県西都市、1976年12月、渡辺撮影)
- ②日向灘の浜辺と漁船
(宮崎県新富町、2015年12月、藤井撮影)
- ③エビス
(大分県佐伯市浦代浦間越 2015年8月、藤井撮影)
- ④天念寺の修正鬼会
(大分県豊後高田市、1974年2月、渡辺撮影)
- ⑤熊本城・宇土櫓
(熊本県熊本市、2015年12月、藤井撮影)
- ⑥長野の岩戸神楽
(熊本県南阿蘇村長陽、1985年10月、渡辺撮影)



表紙・口絵写真 九州の民俗……………

目次

九州の民俗

人吉藩の水陸連携魚輸送 — 球磨川舟運から椎葉山へ — ……

南九州における土人形の由来と継承 — 佐土原人形と帖佐人形 — ……

宮崎県・大分県のウミガメの民俗

— 利用・信仰習俗と保護をめぐる地域的差異と時代的变化 — ……

大分県佐伯市沖黒島におけるカワウの糞採取習俗 ……

熊本時代の大塚磨について ……

胡桃沢 勘司
網 伸也
藤 井 弘 章
渡 辺 良 正

胡桃沢 勘司 1

網 伸也 35

藤 井 弘 章 69

藤 井 弘 章 243
牧 野 厚 史

井 田 泰 人 285

書評と紹介

田中宣一著『名づけの民俗学―地名・人名はどう命名されてきたか』……………辻貴志 317

近畿大学構内遺跡学術調査の紹介(三)……………藤田義成 327

付 録

民俗学研究所第二七回公開講演会

考古学からみた江戸の葬送習俗(講演要旨)……………谷川章雄 329

野本寛一先生が文化功労者として顕彰されました……………胡桃沢勘司 335

執筆者紹介……………

投稿規程……………343 339

九州の民俗

熊本地震で被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます

『民俗文化』第二八号を「九州の民俗」として刊行いたします。収めましたのは、熊本・大分・宮崎・鹿児島四県に関わる、報告でございます。これの執筆に必要な資料を集めるため、研究所員は、平成二十七年の夏から秋にかけて、現地へお伺いいたしました。各地で地元の皆様方から御高配を賜り、多くの成果を大学に持ち帰ることが出来ております。その内容を公表すべく、原稿執筆を進めております最中に、今回の地震が起きてしまったのです。昨年、各地を歩いている時は、この場所が、およそ半年後に、激甚災害に襲われるなどという事態は、想像すらつかないことでした。熊本城をはじめとする、目にした記憶も新しい景観が、変わり果てた姿になってしまった現実には、今なお心を痛めております。被災者の皆様にお見舞いを申し上げますとともに、尊い一命を落とされた方々の御冥福をお祈り申し上げます。

研究所が、前年に研究対象とした所が被災地となってしまったのは、実は二度目のことなのです。『民俗文化』第三号（平成三年三月）は「有明海特集」でして、現地訪問は平成二年ですが、平成三年六月に雲仙普賢岳が爆発して火砕流が発生し、大きな被害をもたらしました。この時は、第三号が刊行された後のことでしたので、お見舞いを申し上げることが叶わなかったのですが、今回は、気持ちばかりの一文を掲げさせていただきました。

『民俗文化』は、口絵をはじめとする多くの写真を載せるのを、特色としております。第二八号の写真は、結果として、被災直前の様相を記録した形となりました。研究所員は、何気ない日常生活を撮影するよう、心がけております。一日も早く、平穏な日々を取り戻していただくために、これらの写真がお役に立つことが有りましたら、復興へのささやかなお手伝いになるうかと、存じております。

執筆 者 紹 介 — 生 年 ・ 出 身 地 ・ 現 職 ・ 著 作 —

胡桃沢勘司（くるみさわ かんじ）一九五一年、長野県生まれ。近畿大学文芸学部教授・同民俗学研究所所長。『西日本庶民交易史の研究』（文献出版、二〇〇〇年）、『牛方・ボッカと海産物移入』（岩田書院、二〇〇八年）、『近世海運民俗史研究——逆流海上の道——』（芙蓉書房出版、二〇一二年）ほか。

網伸也（あみのぶや）一九六三年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授・同民俗学研究所所員。『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一一年）、『仁明朝史の研究——承和転換期とその周辺——』（共著、思文閣出版、二〇一一年）ほか。

藤井弘章（ふじい ひろあき）一九六九年、和歌山県生まれ。近畿大学文芸学部准教授、同民俗学研究所所員。『熊野川町史 通史編』（共著、和歌山県新宮市、二〇〇八年）、『丹生都比売神社史』（共著、丹生都比売神社、二〇〇九年）、『人と動物の日本史』四（共著、中村生雄・三浦佑之編、吉川弘文館、二〇〇九年）、『高野町史 民俗編』（共著、高野町、二〇一二年）ほか。

井田泰人（いだ よしひと）一九六九年、大阪府生まれ。近畿大学短期大学部教授。『大手化粧品メーカーの経営史的研究』（晃洋書房、二〇一二年）、『熱き男たちの鉄道物語』（共著、ブレーンセンター、二〇一二年）、『歴史に学ぶ経営学』（共著、学文社、二〇一三年）ほか。

牧野厚史(まきの あつし) 一九六一年、兵庫県生まれ。

熊本大学教授。「農山村の鳥獣被害に対する文化論

的分析——村落研究からの提言『村落社会研究』四六

(農山漁村文化協会、二〇一〇年)、「動植物にとつての

近代社会」鳥越皓之編『環境の日本史 五 自然利用

と破壊——近現代と民俗』(吉川弘文館、二〇一三年)

ほか。

辻貴志(つじ たかし) 一九七三年、大阪府生まれ。近

畿大学非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研

究員「The Technique and Ecology Surrounding Moray

Fishing - A Case Study of Moray Trap Fishing on

Macian Island, Philippines」, Rintaro Ono, David

Addison, Alex Morrison (eds.), (Prehistoric Marine

Resource Use in the Indo-Pacific Region. Australian

National University Press' 二〇一三年)「フィリピ

ン・パラワン島先住民モルボッグの貝の採捕と民俗知

識『年報人類学研究』三(二〇一三年)、「フィリピ

ン・セブ州マクタン島における潜水採貝漁の事例報告」

『社会情報研究』一四(二〇一五年) ほか。

谷川章雄(たにがわ あきお) 一九五三年、東京都生ま

れ。早稲田大学教授。「近世墓標の変遷と家意識」『史

観』一二二、一九八九年)、「考古学からみた近世都市

江戸」『史潮』新三三、一九九三年)、『墓と埋葬と江戸

時代』(共著、吉川弘文館 二〇〇四年)、『六道銭の考

古学』(共編著、高志書院、二〇〇九年) ほか。

藤田義成(ふじた よしなり) 一九五九年、鹿児島県生

まれ。近畿大学文学部事務部(民俗学研究所) 職員。

「東広島ニュータウン遺跡群新住西一・四地点遺跡調査

報告書(一九九二年)」、「小若江遺跡第六次発掘調査報

告書(二〇一〇年)」ほか。

渡辺良正（わたなべ よしまさ） 一九三三年、福岡県生まれ。毎日新聞東京本社出版写真部（一九六四―六六年）勤務後フリーとなり、日本国内の祭り、神事芸能、民俗芸能の取材に専念。現在、日本写真家協会会員、民俗芸能学会評議員。主たる写真集に、『椎葉神楽』（平河出版社、一九九六年）、『沖縄先島の世界』（木耳社、一九七二年）、『日本の祭り 山車と屋台』（サンケイ新聞社、一九八〇年）、など。

民俗文化 投稿規程 (平成二十二年十月)

一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。

二、刷り上がりは、A五判・縦書き、一ページあたり五十一字×十九行を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。

三、投稿の締切日は、毎年二月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体(CD等)を添えて編集委員に提出する。

四、別刷は五十部を無料とする。

五、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。

六、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、冊子体以外の媒体(近畿大学学術情報リポジトリ等)で公開されることを承諾のうえ投稿

すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

民 俗 文 化 第 28 号

平成 28 年 7 月 31 日印刷

平成 28 年 7 月 31 日発行

編集・発行者

近畿大学民俗学研究所

〒577-8502

東大阪市小若江3丁目4番1号

電 話 (06) 6721-2332

印 刷 所

近畿大学 管理部 用度課
